

「誰にも話さないように」

マルコによる福音書 三章二〇〜二七節

南山教会 二〇二六年三月八日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日もご一緒に、みことばに聴きましよう。

今日の聖書箇所は、「ペトロ、信仰を言い表す」と題されています。マルコによる福音書の分水嶺とも呼ばれる部分です。これまで悪霊によって口にされていた、いわゆる「信仰告白」、ナザレのイエスとは誰か、何者かについて、はじめて人の口によって、公に語られるのです。ペトロは一番弟子として、ここでその光栄ある役割を演じています。マルコの意図として、この個所が重要な位置を占めていることは、今日の箇所直前に、「盲人の癒し」の物語が置かれている所からも、伺えます。二四節「盲人は見えるようになって、言った。『人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります』」。この言葉によって、マルコは読者に問うているのです。「あなたはあの方がちゃんと見えているか、どう見えているのか」。

イエスと弟子たち一行が、「その途中」つまり移動中に、ある問答が行われた、ということです。「途中」という何気ない言葉、しかしマルコはこの言葉にこだわりを持って用いています。「結果」ではなく「途中」に注目しなさい、「結果」ばかりに目を奪われるな、「途

中」をあなたはどうか受け止め、どう見ているのか、と。すべてが見えている訳でも、全部わかっていてもありません。これからどうなるか、上手く行くか、破滅が待っているのか、見通しが立たず、ぼんやりしている。そういう途中に私たちは置かれています。分からない、が分からないなりに、語り行動し決断する必要があります。そういう「途中」をどう歩むのか。できれば「楽しんで」行きたいけれど、「心配」や「不安」だけで費やしたくはない。その途中で主イエスは弟子たちに問いかけます。「途中」とは「主から問われる時」なのかもしれません。

「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」。文化人類学者は、こういう他人の評価を尋ねる問いを発する行為は、古代人の自己理解のあり方を典型的に示すものだと言います。自分の目で、自分自身がどんな人間であるか、どんな価値があるかを考えるのは、現代の思考形態なのです。他人からの評価、他人の噂だけが、自己理解のための材料なのです。だから殊更、他人の目を意識し、他人の評判ばかり気にする人は、古代的な感覚の持ち主だということになります。

二八節以下の弟子たちの答え、「エリヤ、ヨハネ、預言者のひとり」という表象は、おそらく当時の人々が、実際、ナザレのイエスについて口にしていた噂でしょう。もちろん良い噂として、です。反発する人たちは、「大飯ぐらいの大酒飲み」とか「罪人の仲間」とか「ベルゼブルの一味」とか、随分の悪口をも語っていたのです。ところがイエスは、他人の噂だけでなく、最も近いところに共にいる、弟子たち自身の目を問うのです。こういう所がただの古代人ではありません。

自分の目の前にイエスがおられる。自分と変わりない人の姿で、共に道を歩き、共に食事

をし、病人を癒し、福音を語っているその人が、問いかけるのです。「それでは、あなたがたは、わたしを何者だというのか」。これに答えてシモン・ペトロが答えます。「あなたは、メシア（キリスト）です」。おそらく最も古く、最初になされた信仰告白、初代教会の信仰告白、教理の原点こそが、この言葉です。確かに「信仰」には「告白」が車輪の両輪のように、いつもくっついていているものですが、その根底には、イエスの問いが先行して語られるのです。「あなたは、わたしを何者だと言うのか」、直接、イエスが、今のこのわたしに、こう問われています。この心を受け止めることなしには、信仰告白は成立しないのです。

「信仰告白」をめぐるこの物語は共観福音書すべてに語られています。それぞれの福音書で、随分の温度差があります。マタイとマルコを比べて見たら、違いは明らかです。マタイは、信仰告白をおこなうシモン・ペトロが称賛され、「この上に教会を立てよう」、さらに「天国の鍵を託そう」、とまで持ち上げられています。ところがマルコは「御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた」、というのです。これはお褒めの言葉ではなく、かえって注意され、厳しく口留めされた、というのです。「信仰告白」をなし、却って当の主から怒られるとはどうしたことでしょうか。「信仰告白」をなし

実は「だれにも話さないように」という言葉こそ、マルコ福音書のキーワードなのです。悪霊に、病を癒された人に、さらに弟子たちに、イエスは「沈黙」を要求されるのです。もちろん、みんなおりこうさんに、主のお言いつけを守ったなら、福音書は書かれなかったでしょうし、教会も、キリスト教も誕生していなかったでしょう。皆、主の言いつけを無視して、いや、黙っていられなくて、盛んにイエスのことを皆に言いふらしたから、教会の今日

があるのです。ではなぜマルコは殊更に、「だれにも話さないように」と福音書で語るのでしょうか。

その答えは、次の段落に記されています。三一節「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはつきりとお話しになった」。この激しい言葉に恐れをなし、主をいさめようとしたペトロは、厳しく叱責されています。つまり、イエスの十字架、そして三日目の復活を見ることなしに、イエスは誰であるか、何者であるか、を語ることはできない、とマルコは強調しているのです。十字架拔きの信仰はありえないのです。

ひとり、遠くからでもいいから十字架の下に立って、血を流して死んで行かれる主を見上げて、そこから主のみ言葉を聞き、反芻し、みわざを思い起こすことなしに、私たちの信じるところは成り立たないのです。そこから以外の信仰の言葉を、主は「話してはならない」と言われるのです。